

『聖体年を終わって』

マリア・マグダレナ 城野 道代

二〇〇五年は世界中で異常現象が起り、地震、津波、台風、ハリケーンと多くの国で人的、物質的被害が相次いだ年であった。第三の千年紀の初めには、人々の終末的あやしげな悲観論が流布されたにもかかわらず、その年は何事もなく過ぎた。しかし、昨年あたりから年毎に災害は増え、国と国、民族間の争いは絶えない。日本国内でも治安は急に悪くなっていく一方である。

カトリック教会では二〇〇五年十月二十三日までの一年間、聖体（エウカリスチア）年であり、最終の日に城北橋教会でもミサのあとベネデイクションが行われた。

一九五〇年頃、四年間住んだ山口では教会が山口駅前であり普通の民家であった。ザビエル生誕の城の近く出身の司祭のもと、信者たち特に青年男女のグループ活動が活発で、なにかにつけ、よく嬉々

として集まったものであった。主日にはミサのあと夕方、聖体降福式があり一日の大半を教会で過ごす人も多かった。最近では修道院以外で主日のミサのあと聖体賛美式をする教会はあまり聞かない。

信州のある老人施設では毎日午前中ミサがあり、日曜日の夜には聖体降福式があった。老いてから集まった人々であり、洗礼を受けたわけだから、神父様はいろいろと工夫されていた。みんな膝、腰が痛いからミサの間、着席のままでご聖体拝領のときになってゆっくり立ち上がり行列が動くのである。不自由な脚をかばい、杖を頼りにお互いを助け合っている行列に胸を打たれた。部屋から出られない人には司祭は祭服のまま御聖体を抱くように捧げて、運んでくださった。私も何度も有り難く恐縮しながらお世話になった。

御聖体は病人を癒し、孤独を耐える人には慰めであった。第二公会議のあと、大分たった頃から女性たちは聖堂に入る時ベールを被ることはなくなっていたので、後から来て外の教会の生活を知る私

達は、当然のように何も被らなかつた。ある時、カナダ人の老師が小さな声で「ベールを被って頂けませんか？」と言われた。理由は抜きであった。ハツとして翌朝から私はしまいこんだままであったベールを使うことにした。老いてから受洗した人たちを躓かせないためと、自分なりに解釈した。あの御聖堂にともる小さな赤いランプのもと朝四時くらいから祈っておられた師に、もうお会いすることはできない。突然、晴天のへきれきのように天に召されてから半年がたった。みこころ修道会では今年スミス師、アスキュー師が帰天された。お好きだった桜は紅葉し、美しく教会の庭を飾っている。優

しかった方々を偲ぶ十一月、多くの人々の祈りが、香とともに天に届くことだろう。

「聖体についてのシノドス」も終わり、普遍であり不変でもあると思ってきた教会の教えも刷新されつつある。カトリック新聞の紙上でも意見、異論が活発で驚くことがある。そして、十一月二十七日はもう待降節第一の主日、教会の暦はまた新しくなる。

「見よ、わたしはあなたをわたしの手のひらに刻みつける」イザヤ書 四九・一六
との御父の言葉を慰めとして、この生き難い人の世の残りの日々を歩んで行きたいと願っている。

